



## 「子育て質問票」の得点分布の研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-10-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川原, 稔久, 川部, 哲也, 長谷川, 智枝, 橋本, 朋広, 高橋, 幸治 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00005284">https://doi.org/10.24729/00005284</a>

【第2部】

「子育て質問票」の得点分布の研究

川原稔久・川部哲也・長谷川智枝・橋本朋広・高橋幸治

1. はじめに

本稿は、「子育て支援に有効なスクリーニング調査票の開発とその有効性の検証」(日本臨床心理士資格認定協会2010年度助成事業重点研究テーマ採択, 助成期間2010年10月～2013年10月)として行われた「子育てについての質問票」(以下「子育て質問票」と略記)の得点分布の研究である。

「子育て質問票」開発の経緯(川原他2013a, 高橋他2013, 川部他2013a, 橋本他2013, 川原他2013b)と「子育て質問票」の得点分布の特徴(川部他2013b), 臨床事例プロフィール解釈(総田他2013)に関しては既に研究発表を行い, その後臨床事例への施行を積み重ねてきている。そこで本稿では, 既出の「子育て質問票」の得点分布の特徴(川部他2013b)を踏まえたいうで, 「子育て質問票」の得点分布の研究を提示する。なお, 本研究の実施については, 大阪府立大学人間社会学部研究倫理委員会の審査を経て承認(平成23年10月6日)を得ている。

2. 目的と方法

(1) 「子育て質問票」開発研究の目的と方法

まず, 得点分布研究の前に, その前提となる「子育て質問票」開発研究の目的と方法の概略をまとめておく。「子育て質問票」開発ではその目的を, ①支援者が,

迅速かつ簡便に親子の状況が把握できること, ②来談者が, 子どもの状況が把握できること, ③それによって, 子育て相談へのモチベーションが高まること, に焦点化している(川部他2013b)。このような目的に焦点化した背景については既に報告しているが(川原他2013a), 端的に言えば, 発達障がい・小児心身症・虐待等家族機能の問題化等を中心に地域住民からの子育て支援ニーズが急増していることに対して, それに即応する心理臨床的な支援を行うことに狙いがある。この目的のために「子育て質問票」開発研究が取り組むべき課題とは, 質問票の開発とその有効性の検証である。

これらの課題に対しては, 目的を踏まえ臨床事例に即した方法で始められた。つまり, ①子育て支援事例および先行研究を踏まえた質問項目の抽出による質問票の構成, ②質問票を臨床事例へ施行することによる検証である。なお, 研究組織の構成(川原他2013aの図1)を以下に再録する。研究会(全体研究会・心身症班・発達障がい班・家族機能虐待班・事例研究班)と臨床チームに大別され, 質問項目の抽出および質問票の構成を研究会で行い, 臨床事例への施行を臨床チームが行い, その検証作業は事例研究班および全体研究会で行った。

①の質問項目の抽出および質問票の構成作業の詳細

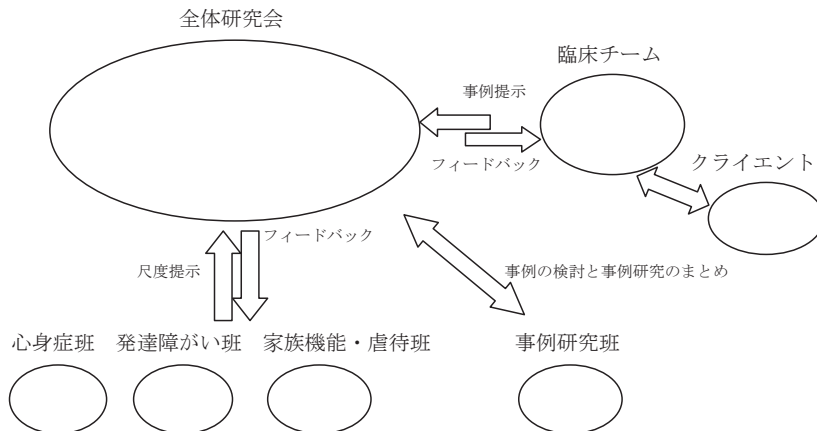


図1 研究の組織(川原他2013aより)

は既に報告してあるが（高橋他2013, 川部他2013a, 橋本他2013, 川原他2013b), その要点をここでまとめておく。まず, 質問項目は大別して「親子の心からだの関係を探る項目」・「発達障がいの特徴を捉える項目」・「家族機能および虐待リスクを捉える項目」の3種としている。「親子の心からだの関係を探る項目」では心身症事例の臨床経験および先行研究に加え, 身体性や身体イメージをテーマとした基礎文献作業から, 身体経験・子どもの主体に対する保護者の姿勢・身体と感情の関係などに関する10項目を抽出している。「発達障がいの特徴を捉える項目」では発達検査 (PEP-3, 津守式乳幼児精神発達検査, KIDS乳幼児発達スケール, 新版K式発達検査)・知能検査 (WISC-3)・発達障がいに関する尺度 (精研式CLAC-II, III, AQ日本語版, PARS) に関する先行研究から発達全般の特徴を踏まえ, 発達障がい事例の臨床経験および発達障がいの診断を受けた人の手記などから発達障がいの体験世界を重視して, 発達障がいの特徴的な10項目 (運動機能・感覚知覚・他者関係・体験世界) を抽出している。「家族機能および虐待リスクを捉える項目」では虐待リスクアセスメント (保護決定アセスメント指標, 虐待要因一覧表, 潜在的児童虐待リスクスクリーニング尺度, 母親の虐待傾向養育態度質問項目) および家族機能尺度 (TK式診断的新親子関係検査, FDT親子関係診断検査, PSI) に関する先行研究を踏まえて11項目 (社会的孤立・愛着・抑うつ・罪悪感等) を抽出した。全体で31項目から構成した「子育て質問票」は資料1に掲載してある。

②の臨床事例へ施行して検証する方法に関しては, その原則的な手順 (川部他2013b) を以下に再録する。子ども事例の保護者が新規に来談した際に, 受付にて

受付窓口担当者が受理面接用の相談申込用紙とともに「子育て質問票」(資料1) を渡し, 研究協力についての説明をする。保護者は, 説明に同意した場合に「子育て質問票」を記入して相談申込用紙とともに受付窓口に提出する。受付担当者は記入済みの「子育て質問票」を受理面接担当者に渡す。

受理面接終了後, 面接担当者は通常作成する受理面接報告に加えて, 「子育て質問票」整理用紙 (資料2,3) を作成する。保護者が回答した「子育て質問票」に基づいて整理用紙にプロフィールを作成し, 受理面接報告を踏まえて, 所見を作成する。このようにして蓄積した臨床事例の「子育て質問票」は全体研究会とそれを踏まえた事例研究班による研究会にて検証される。全体研究会ではプロフィールを読み込み, 事例経過と照合して臨床的意義を議論・検討する。事例研究班では全体研究会の検討を踏まえた解釈を作成する。

## (2) 「子育て質問票」の特徴

質問31項目について保護者は「まったくあてはまらない」「あまりあてはまらない」「どちらでもない」「ややあてはまる」「かなりあてはまる」の5件のいずれかに丸印 (○) を付けて回答する。丸印で回答する欄は5件に該当する目盛りを付けた物差状のもので, 目盛りの中間に丸印を付けた回答が出来る場合もある。また, 表紙の説明書きには「答えにくい質問や答えたくない質問については, 回答しなくてかまいません。」という一文が添えられている (資料1参照) ため, 無回答項目が出来る場合がある。

31項目は前半の子どもに関する質問項目 (1~12) と後半の保護者に関する質問項目 (1~19) に大別される。子どもに関する質問項目は以下c1~c12とし,

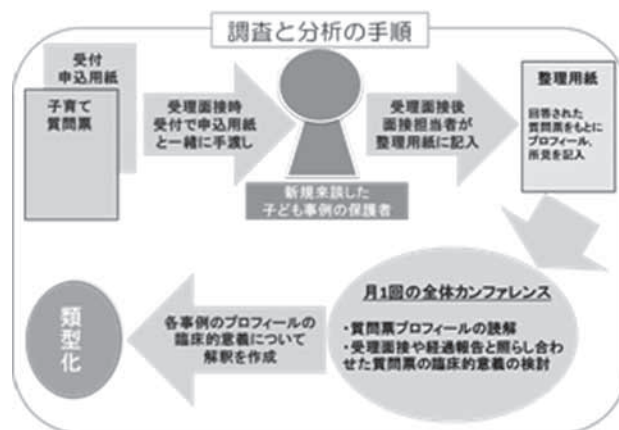


図2 調査と分析の手順 (川部他2013bより)

保護者に関する質問項目はp1~p19と記載する。回答する保護者は最初、子どもについてその発達特徴を回答することから取り組み、次第に親子の関係、心とからだの関係、保護者自身の子育て状況やそれにまつわる心理状態を振り返る作業に取り組むことになる。前頁で述べたように質問項目は大別して「親子の心とからだの関係を探る項目」・「発達障がいの特徴を捉える項目」・「家族機能および虐待リスクを捉える項目」の3種であり、それぞれの項目群を「親子の心とからだ領域」・「発達障がい領域」・「家族機能領域」と呼称する。「発達障がい領域」では、子どもの行動特性の観察を反映した回答に加えて、観察者としての保護者自身の特性や子どもへの関わり方を反映した回答も現れることが特徴である。「親子の心とからだ領域」では、子どもと保護者の身体への関わり、保護者自身の潔癖性傾向、子どもへの姿勢が問われているのが特徴である。「家族機能領域」では、子どもや家族との関係、その文脈での保護者自身の状態を問うており、保護者の自己および子どもとの関係がよく表現されることが特徴である（川部他2013b）。

### (3) 本稿における得点分布研究の目的と方法

検証作業では「子育て質問票」開発の目的に添って臨床事例に即した方法を取っているが、その解釈にあたってはむしろ「子育て質問票」の一般的な回答傾向を踏まえる必要がある。一般傾向との比較を踏まえて、臨床事例の回答傾向の意味付けや解釈を検討する必要がある。そのため、この「子育て質問票」の一般的な回答傾向をおおよそ探るために対照群（子育て支援の講演会参加者15名）への調査を2013年6月に

行い、臨床群との比較研究の発表を2013年8月に一旦行っている（川部他2013b、臨床群24名）。

その後、臨床事例への施行を積み重ね、2013年12月までに臨床例は56例となった。本稿では、それら臨床群56例のデータを踏まえてあらためて得点分布の特徴を分析することで、一般傾向と臨床群それぞれの特徴を検討することを目的とする。まず対照群と臨床群両方を合わせた全体の傾向を分析し、次に対照群と臨床群の比較を分析し、最後に31項目毎の分布特徴をまとめる。むしろ対照群の規模や構成は不十分であるため、対照群との比較には限界が伴い議論や結論をそのまま一般化はできないので、これらの結果を踏まえて今後より多くの対照群を集積した研究を展望したい。その点については最後に述べる。

## 3. 得点分布の分析

### (1) 欠損値の傾向

得点の分布をみる前にデータの特徴として欠損値の傾向を示しておきたい。ここで、欠損値とは、質問票に①無回答の項目がある場合、②複数個所に回答されている場合、③5件法の日盛の中間に回答の丸印が打たれている場合、を指している。この場合は得点化ができないという意味で、ここでは欠損値と呼ぶことにする。これらを取り上げた理由は、対照群と臨床群では欠損値の出現率が大きく異なることと臨床群での欠損値出現項目にある傾向が見られたからである。

対照群15例のうち欠損値があったのは2例で出現率は13.3%であるのに対して、臨床群56例では20例で欠損値があり35.7%であった。また、対照群2例ではいずれも欠損箇所は1カ所ずつで（いずれも保護者へ

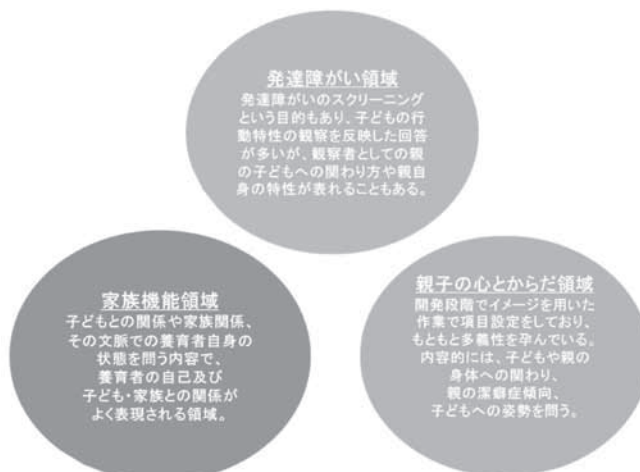


図3 「子育て質問票」の特徴（川部他2013bより）

の質問項目（p項目）があるが、臨床群での欠損値20例のうち8例では複数項目での欠損が見られた。このことは臨床群の大きな特徴であり、質問項目の特徴であると考えられよう。つまり、質問項目が臨床群においては回答行動に揺れを誘発していることから、質問項目がある種の刺激となっている可能性があると考えられよう。質問票の特徴で前述したように、質問票では子どもの特徴に加えて、子どもと保護者の関係、親子の身体への関わり、保護者のあり方が問われるために、質問が刺激となって生じた保護者の意識的無意識的な揺れが回答行動に反映されることが考えられる。その臨床的な内実は事例研究的なアプローチによって検討することが可能と思われるが、臨床事例プロフィールにおける無回答のパタンの臨床的な意味とその解釈に関しては、本誌の総田ら（2014）による別稿を参照してほしい。

さらに、臨床群での欠損値例では子供に関する質問項目（c1~c12）に欠損箇所が集まる傾向が見られた。臨床群で31項目での欠損頻度を比較してみると、c6以外の子どもに関する質問項目すべてで欠損頻度は3

回以上であるのに対して、保護者自身に対する質問項目のうちp17とp19以外のすべてで出現頻度は2回以下である。質問が刺激となってそれに対する回答者の揺れが回答行動に反映するとすれば、臨床群では子どもについての質問に揺れやすいかもしれない。

なお、本稿の以下の得点分布の分析では、分布のおよその傾向と特徴を知ることが目的なので、欠損値がある回答も含めて頻度を計算している。欠損値のある回答例を省くと欠損値の無い有効回答数が少なくなり分布傾向を見出しにくいと判断した。

## (2) 全体的な傾向

まず、対照群（n=15）と臨床群（n=56）の両群を合わせて（n=71）、29項目（p18p19の2項目は臨床群のみなので省かれている）それぞれの得点（1~5）の頻度分布の傾向を調べる。ただし全体を占める割合は臨床群が多いので、結果は臨床群での分布傾向に強く影響されているため、全体傾向として一般化することは出来ない。項目毎に得点の低群（1,2）・中群（3）・高群（4,5）の3群での得点頻度の偏り具合について $\chi^2$ 検

表1 全体傾向として偏りが有意な項目

	項目内容	全体傾向	$\chi^2$ 二乗値, 有意水準
c2	感覚が敏感なときがある	どちらでもない～当てはまる	$\chi^2(2)=19.567$ , $p<.01$
c3	言葉の使い方に特徴がある	低群<中群	$\chi^2(2)=9.913$ , $p<.01$
c4	ルールのある遊びを楽しめる	どちらでもない～当てはまる	$\chi^2(2)=13.654$ , $p<.01$
c7	ふとしたことで取り乱し落ち着くのに時間がかかる	どちらでもないが少ない	$\chi^2(2)=18.871$ , $p<.01$
c8	友達と仲良くしたい気持ちがあるが、友達関係をうまく作れない	どちらでもないが少ない	$\chi^2(2)=10.777$ , $p<.01$
c9	人からのちょっとした働きかけを嫌がる	低群>中群	$\chi^2(2)=7.177$ , $p<.05$
c12	子どもは気持ちが不安定になるとからだの調子が悪くなる	どちらでもないが少ない	$\chi^2(2)=15.915$ , $p<.01$
p1	育児の相談をできる人がいる	当てはまる	$\chi^2(2)=62.570$ , $p<.01$
p2	子どもと目が合うと嬉しい	低<中<高	$\chi^2(2)=67.007$ , $p<.01$
p3	痛がっている子どものからだをさすると、痛みがおさまるときがある	当てはまる	$\chi^2(2)=38.604$ , $p<.01$
p4	子どもが好きと思えない	当てはまらない	$\chi^2(2)=67.303$ , $p<.01$
p5	誰にも育児を手伝ってもらえない	当てはまらない	$\chi^2(2)=45.755$ , $p<.01$
p6	子どもの欠点が目につく	当てはまる	$\chi^2(2)=39.204$ , $p<.01$
p8	なぜか疲れやすい	当てはまる	$\chi^2(2)=32.144$ , $p<.01$
p9	育児に自信が持てない	低群<高群	$\chi^2(2)=12.029$ , $p<.01$
p10	子どもに対してイライラする	当てはまる	$\chi^2(2)=33.587$ , $p<.01$
p11	子どものいやな気持ちを取り除くことは母親の役目である	どちらでもない～当てはまる	$\chi^2(2)=21.459$ , $p<.01$
p13	子どもに関心を向けるようがない	当てはまらない	$\chi^2(2)=33.803$ , $p<.01$
p14	わが子がなぜ甘えてくるのかわからないときがある	当てはまらない	$\chi^2(2)=33.375$ , $p<.01$
p15	妊娠や出産のときにうれしくなかった	当てはまらない	$\chi^2(2)=45.755$ , $p<.01$
p16	砂遊びをさせることに抵抗がある	当てはまらない	$\chi^2(2)=64.090$ , $p<.01$
p17	オムツをかえるのはゆううつだった	当てはまらない	$\chi^2(2)=105.141$ , $p<.01$



定を行うと、有意な項目が22項目あった(表1)。たとえば、c2「感覚が敏感なときがある」では「どちらでもない」から「あてはまる」に偏る傾向がある。c3「言葉の使い方に特徴がある」では「あてはまらない」ことが少ない傾向にある。c9「人からのちょっとした働きかけを嫌がる」では「あてはまらない」ことが多い傾向にある。p2「子どもと目が合うと嬉しい」ではそういう保護者が多い。

逆に、これらの項目に見られた全体傾向とは異なった回答をした事例では、珍しい回答をしたという意味でその特異性を鑑みる必要があると思われる。

また、これら以外の7項目(c1「運動が得意だ」、c5「何が面白いのかよく分からない遊びを延々とする」、c6「手先が不器用である」、c10「私とのコミュニケーションがスムーズである」、c11「子どもは私のいいつけをよく守る」、p7「子どもが期待通りいなくて困る」、p12「子どもが何か悪いことをすると私のせいだと思ってしまう」)は全体では偏りが大きくないということになる。

次に、これら22項目のうち9項目は対照群と臨床群の差が有意であったので、次項でそれらを取り上げる。

(3) 両群の比較 - 分布差がある項目

対照群と臨床群の差が有意であった項目(表2 c7「ふとしたことで取り乱し、落ちつくのに時間がかかる」、c12「子どもの気持ちが高ぶるとからだの調子が悪くなる」、p9「育児に自信が持てない」、p10「子どもに対してイライラする」)が、対照群ではあてはまらず臨床群ではあてはまる。ただし、c8「友達と仲よくしたい気持ちがあるが、友達関係をうまくつけれない」とp11「子どもの嫌な気持ちを取り除くことは母親の役目である」の2項目は低群のみの差なので、いずれも対照群ではあてはまらない傾向である。

また、有意傾向(表3)を拾うと、p6「子どもの欠点が目につく」ことは「どちらでもない」が少なく、対照群ではあてはまらず臨床群ではあてはまる傾向である。c4「ルールのある遊びを楽しめる」とp1「育児の相談をできる人がいる」では対照群ではあてはまる傾向にある。

さらに、p12「子どもが何か悪いことをすると私のせいだと思ってしまう」は対照群ではあてはまらない傾向であるが、群間差のみで有意傾向を示し全体としては偏りが有意でなかったため、全体では偏りの傾向は相殺されていると考えられる。

表2 群間差が有意であった項目

		対照群	臨床群	$\chi^2$ 乗値, 有意水準, クラメルV係数
c7	ふとしたことで取り乱し落ちつくのに時間がかかる	「当てはまらない」傾向	「当てはまる」傾向	$\chi^2(2)=8.990$ , $p<.05$ , Cramer'sV=0.360
c8	友達と仲よくしたい気持ちがあるが、友達関係をうまく作れない	「当てはまらない」回答多い	「当てはまらない」回答少ない	$\chi^2(2)=6.354$ , $p<.05$ , Cramer'sV=0.307
c12	子どもは気持ちが高ぶるとからだの調子が悪くなる	「当てはまらない」傾向	「当てはまる」傾向	$\chi^2(2)=13.733$ , $p<.01$ , Cramer'sV=0.446
p9	育児に自信が持てない	「当てはまらない」傾向	「当てはまる」傾向	$\chi^2(2)=14.677$ , $p<.01$ , Cramer'sV=0.454
p10	子どもに対してイライラする	「当てはまらない」傾向	「当てはまる」傾向	$\chi^2(2)=7.322$ , $p<.05$ , Cramer'sV=0.318
p11	子どものいやな気持ちを取り除くことは母親の役目である	「当てはまらない」回答多い	「当てはまらない」回答少ない	$\chi^2(2)=8.133$ , $p<.05$ , Cramer'sV=0.340

表2 群間差が有意傾向であった項目

		対照群	臨床群	$\chi^2$ 乗値, 有意水準. クラメルV係数/ファイ係数
c4	ルールのある遊びを楽しめる	「当てはまる」回答多い	「当てはまる」回答少ない	$\chi^2(2)=5.072$ , $.05<p<.10$ , Cramer'sV=0.271
p1	育児の相談をできる人がいる	「当てはまる」回答多い	「当てはまる」回答少ない	$\chi^2(2)=5.532$ , $.05<p<.10$ , Cramer'sV=0.279
p6 <sup>(*)</sup>	子どもの欠点が目につく	「当てはまらない」傾向	「当てはまる」傾向	$\chi^2(1)=3.545$ , $.05<p<.10$ , Phi=0.247
p12	子どもが何か悪いことをすると私のせいとおもってしまう	「当てはまらない」回答多い	「当てはまらない」回答少ない	$\chi^2(2)=5.942$ , $.05<p<.10$ , Cramer'sV=0.291

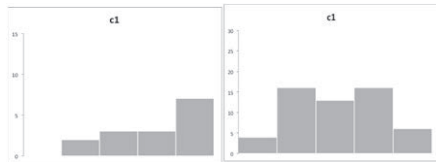
(\*)1) 対照群の期待値が5に満たないため、中群を削除して高群vs低群で検定

(4) 分布の特徴

ここでは各項目について臨床群 (n=56) の分布特徴を概観する。

「c1. 運動が得意だ」

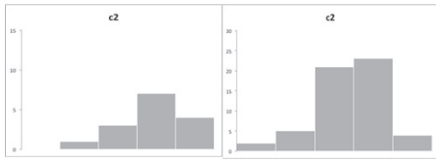
対照群ではあてはまらないことは無く「かなりあてはまる」が多いのに対して、臨床群では中間域に散らばる。全体で偏らない。



対照群 15名      臨床群 56名

「c2. 感覚(見る力, 聞く力など)が敏感なときがある」

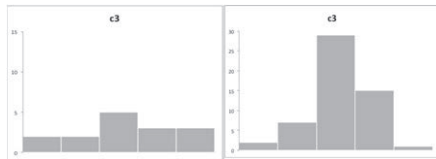
いずれの群でも「ややあてはまる」が多いが、臨床群で「どちらでもない」が顕著か。



対照群      臨床群

「c3. 言葉の使い方に特徴がある」

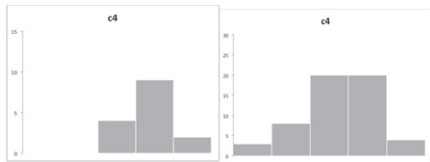
臨床群で「どちらでもない」と「ややあてはまる」が目立つ。



対照群      臨床群

「c4. ルールのある遊びを楽しめる」

対照群であてはまる傾向。臨床群で「どちらでもない」の割合が相対して高くなる。対照群で遊びを楽しめないことは無いが、臨床群では楽しめないことがある。

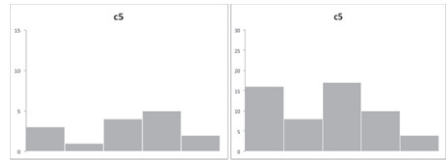


対照群      臨床群

「c5. 何が面白いのかよく分からない遊びを延々とする」

どちらの群でも偏らずばらつきがあると考えるのが良い

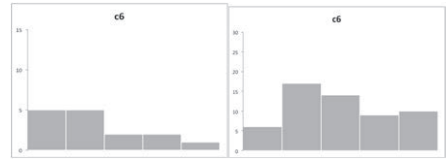
かもしれない。臨床群の方がむしろ少ない傾向か。



対照群      臨床群

「c6. 手先が不器用である」

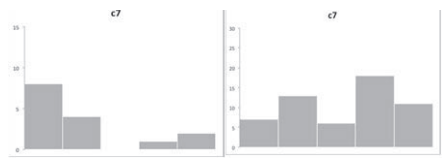
全体では偏らないであろう。対照群では「まったくあてはまらない」の度数が増えてくる。



対照群      臨床群

「c7. ふとしたことで取り乱し、落ちつくのに時間がかかる」

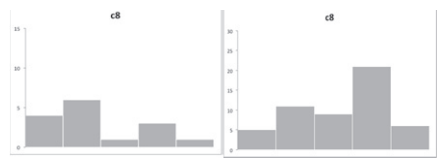
対照群では「あてはまらない」が多く、臨床群では「あてはまる」が多くなる。



対照群      臨床群

「c8. 友達と仲よくしたい気持ちがあるが、友達関係をうまくつけれない」

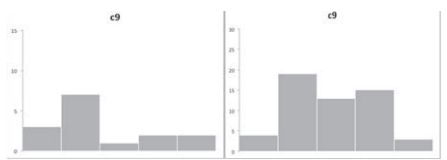
対照群は「あてはまらない」方で、臨床群では「ややあてはまる」。



対照群      臨床群

「c9. 人からのちょっとした働きかけ(声かけ, 手助けなど)を嫌がる」

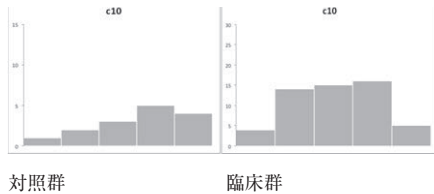
対照群ではあてはまらないことが多いが、臨床群では相対して「どちらでもない」「ややあてはまる」が多い。



対照群      臨床群

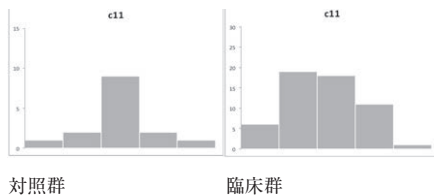
「c10. 私とのコミュニケーションがスムーズである」

全体で偏らない傾向。中間帯で「ややあてはまる」に向けて漸増。臨床群では相対して「かなりあてはまる」は少なく「あまりあてはまらない」が多い。



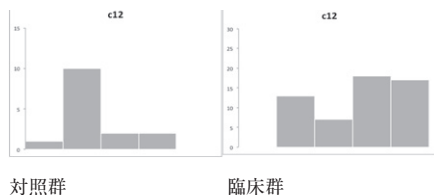
「c11. 子どもは私のいつけをよく守る」

全体では偏りが少ない傾向。対照群では「どちらでもない」が多く、臨床群では相対して「あまりあてはまらない」が多い。



「c12. 子どもは気持ちが不安定になるとからだの調子が悪くなる」

対照群では「あまりあてはまらない」が、臨床群ではあてはまる頻度が高い。

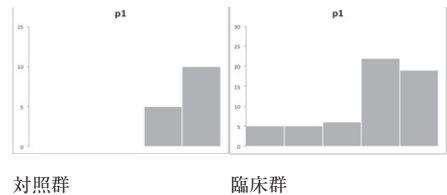


子どもについての質問項目では、c7「ふとしたことで取り乱し、落ちつくのに時間がかかる」・c8「友達と仲よくしたい気持ちがあるが、友達関係をうまくつぐれない」・c9「人からのちょっとした働きかけ（声かけ、手助けなど）を嫌がる」・c11「子どもは私のいつけをよく守る」の各項目で対照群と臨床群の傾向が異なり、およそ臨床群の方が問題傾向を反映していると考えられる。また、分布の偏りが顕著ではない項目であっても、たとえば、c1「運動が得意だ」・c5「何が面白いのかよく分からない遊びを延々とする」・c6「手先が不器用である」では、臨床群で問題傾向を感じさせる。またとくに、対照群では、運動がまったく苦手ということは無く（c1）、ルール遊びを楽しめないことは無い（c4）ということが予想される。

つぎは保護者への質問各項についてである。

「p1. 育児の相談を出来る人がいる」

対照群では相談できる人がいることがほとんどであるのに対して、臨床群では相談できる人がいない場合がある。

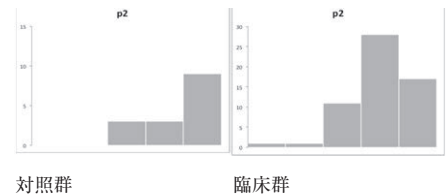


対照群

臨床群

「p2. 子どもと目が合うとうれしい」

いずれの群も多くはそうである。対照群ではあてはまらない人はいないのに対し臨床群ではあてはまらない人が若干いる。また、ややあてはまる方が多い。

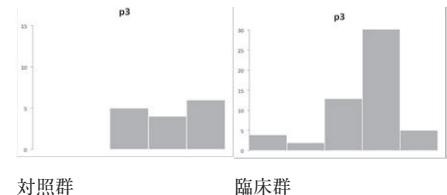


対照群

臨床群

「p3. 痛がっている子どものからだをさすると、痛みがおさまることがある」

全体であてはまる傾向。多くはそうである。対照群であてはまらない人はいないのに対して、臨床群にはあてはまらない人がいる。

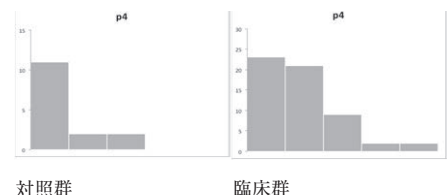


対照群

臨床群

「p4. 子どもが好きと思えない」

ほとんどがあてはまらないが、臨床群にあてはまる人が若干現れてくるのが特徴。



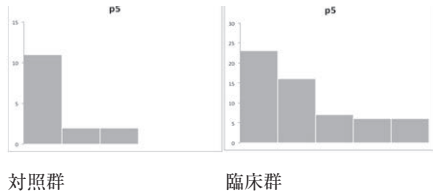
対照群

臨床群

「p5. 誰にも育児を手伝ってもらえない」

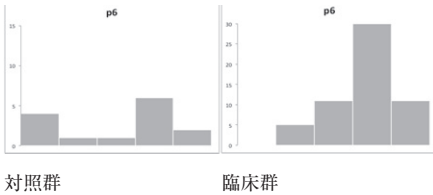
全体で、あてはまらないのが多い。臨床群に手伝ってもらえない人が出てくる。





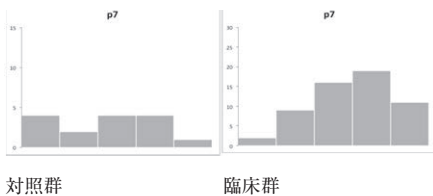
「p5.子どもの欠点が目につく」

対照群は二山になるかもしれないが、臨床群はあてはまる側にピークがくる。また、「まったくあてはまらない」＝「欠点が目につかない」が、臨床群では無く、対照群にはある。



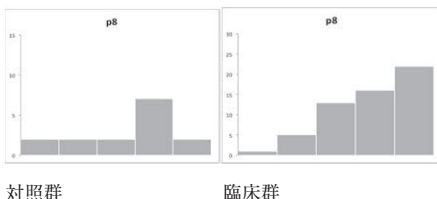
「p7.子どもが期待通りいなくて困る」

全体で、偏りが少ない傾向だが、臨床群においてあてはまる方向である。「どちらでもない」も多い。



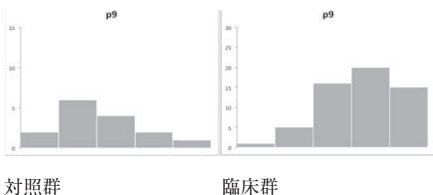
「p8.なぜか疲れやすい」

全体であてはまる傾向。臨床群ではかなりあてはまるがピークとなる。



「p9.育児に自信が持てない」

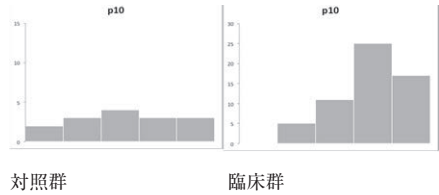
対照群では「あまりあてはまらない」、逆に臨床群ではあてはまるが多い。



「p10.子どもに対してイライラする」

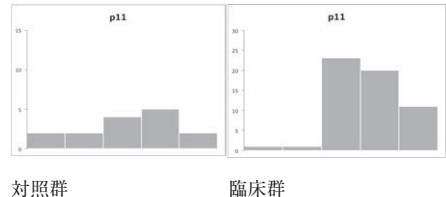
これもp6~p8と同じように対照群は平坦で、臨床群

はあてはまる側にピークがくる。



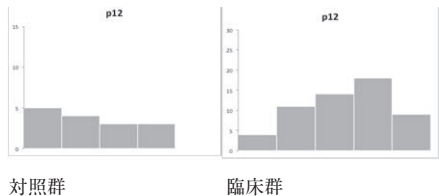
「p11.子どものいやな気持ちを取り除くことは母親の役目である」

臨床群はあてはまらないとはしない。どちらでもないと迷うか、あてはまるかである。対照群で、あてはまらないが出てくる。



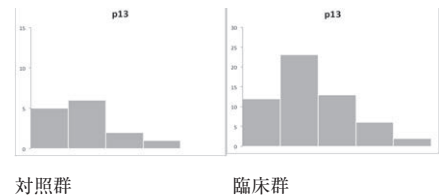
「p12.子どもが何か悪いことをすると私のせいだと思ってしまう」

対照群が否定傾向であるのに対して、臨床群はあてはまる傾向。臨床群では「どちらともいえない」も多い。



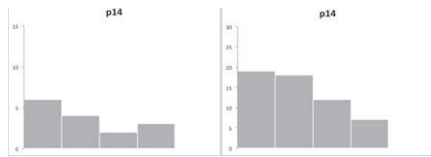
「p13.子どもに関心を向ける余裕がない」

両群ともあてはまらない方向で、分布の形が似ている。



「p14.わが子が、なぜ甘えてくるのかわからない時がある」

これもp13と似ている。あてはまらないがより明確で「かなりあてはまる」ことは無い。が、「ややあてはまる」は出てくる。



対照群

臨床群

「p15. 妊娠や出産のときにうれしくなかった」

ほとんどが否定である。ただし、若干あてはまる人がいる。



対照群

臨床群

「p16. 子どもに公園の砂場で砂遊びさせることに抵抗がある」

ほとんどは否定だが、臨床群に肯定が出てくる。

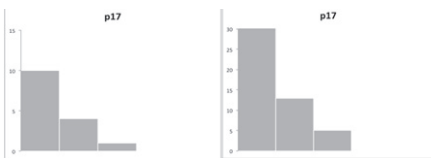


対照群

臨床群

「p17. オムツをかえるのはゆううつだった」

これもほとんど否定がより徹底されている。「どちらでもない」がわずかで、肯定は無い。



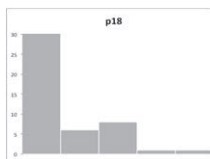
対照群

臨床群

「p18. どうしてここに来ないといけないかわからない」

この項目は臨床群のみで、対照群の質問票からは省いた。

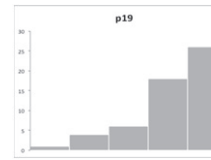
ほとんどが否定で、「どちらでもない」迷いが少しで、肯定は若干である。



臨床群

「p19. 今ある症状をいっくも早く取り除いてほしい」

この項目も臨床群のみである。ほとんどが肯定である。



臨床群

以上が保護者の分布の特徴かと思われる。それらを整理すると、まず保護者項目に僅かながら見受けられるのが、分布の傾向が両群でとくに似ている項目 (p15, p17) である。つまり、およそ多くの保護者は妊娠や出産がうれしく (p15), オムツをかえるのはゆううつではない (p17) ことから、この一般傾向と異なる回答は特異点と考えられる。

そして子どもに関する項目と同様に、分布の傾向が両群で反対方向に異なり臨床群でより問題傾向を示す項目 (p6, p8, p9, p10, p11, p12) があるかと思われる。臨床群の多くは、「子どもの欠点が目につく」・「なぜか疲れやすい」・「自信が持てない」・「子どもに対してイライラする」・「子どものいやな気持ちを取り除くことは母親の役目である」・「私のせいだと思ってしまう」という問題傾向を示す。これらの項目は子育て問題を拾い上げるのに有効だと思われる。

さらに、保護者の項目の両群いずれにも、分布の偏りが顕著な項目 (p1, p2, p4, p5, p15, p16, p17, p18, p19) が見受けられる。それらを整理する。

①回答が「あてはまる」に集中するパターン

p1「育児の相談を出来る人がいる」、p2「子どもと目が合うとうれしい」は、いずれもあてはまるに集中するので、逆に臨床群の少数の「あてはまらない」は特異性を持つ。

②回答が「あてはまらない」に集中するパターン

p4「子どもが好きと思えない」、p5「誰にも育児を手伝ってもらえない」、p15「妊娠や出産のときにうれしくなかった」p16「子どもに公園の砂場で砂遊びさせることに抵抗がある」p17「オムツをかえるのはゆううつだった」は、いずれも「あてはまらない」に集中するので、臨床群の「あてはまる」は特異性を持つ。

③臨床群のみで一方に集中するパターン

p18「どうしてここに来ないといけないかわからない」は「あてはまらない」方向に集中するので、「あてはまる」は特異性を持つ。逆に、p19「今ある症状をいっくも早く取り除いてほしい」は「あてはまる」に集中する。

4. まとめ

これまでの検討をまとめると、以下の①～④となるかと思う。

- ①全体では多くの項目（22項目）で分布の偏りがあることが分かった。
- ②対照群と臨床群とで分布に差がある項目については、c7「ふとしたことで取り乱し、落ちつくのに時間がかかる」、c12「子どもの気持ちが不安定になるとからだの調子が悪くなる」、p9「育児に自信が持てない」、p10「子どもに対してイライラする」が、対照群であってはならず臨床群であってはまる。
- ③個々の項目を臨床群の分布で検討すると、子どもについての質問項目では、c7「ふとしたことで取り乱し、落ちつくのに時間がかかる」・c8「友達と仲よくしたい気持ちがあるが、友達関係をうまくつくれ

ない」・c9「人からのちょっとした働きかけ（声かけ、手助けなど）を嫌がる」・c11「子どもは私のいいつけをよく守る」の各項目で対照群と臨床群の傾向が異なり、およそ臨床群の方が問題傾向を反映していると考えられる。

- ④およそ多くの保護者は妊娠や出産がうれしく（p15）、オムツをかえるのはゆううつではない（p17）ことから、この一般傾向と異なる回答は特異点と考えられる。臨床群の多くは、「子どもの欠点が目につく」・「なぜか疲れやすい」・「自信が持てない」・「子どもに対してイライラする」・「子どものいやな気持ちを取り除くことは母親の役目である」・「私のせいだと思ってしまう」という問題傾向を示す。

以上、分布の特徴として見出されたものをまとめると以下（表4）のようになるかと思われる。

表4 項目ごとの特徴

番号	内容	特徴
c1	運動が得意だ	全体で、当てはまるから当てはまらないまで、偏らない傾向
c2	感覚が敏感なときがある	全体で、どちらでもないから当てはまる寄りの傾向
c3	言葉の使い方に特徴がある	全体で、「どちらでもない」が多いと言えそう
c4	ルールのある遊びを楽しめる	対照群で、当てはまる傾向
c5	何が面白いのかよくわからない遊びを延々とする	全体で、偏らない傾向
c6	手先が不器用である	全体で、偏らない傾向
c7	ふとしたことで取り乱し落ちつくのに時間がかかる	対照群で当てはまらず、臨床群で当てはまる
c8	友達と仲よくしたい気持ちがあるが、友達関係をうまく作れない	対照群で、当てはまらない傾向
c9	人からのちょっとした働きかけを嫌がる	全体で、当てはまらないが多いと言えそうか
c10	私とのコミュニケーションがスムーズである	全体で、偏らない傾向
c11	子どもは私のいいつけをよく守る	全体で、偏らない傾向
c12	子どもは気持ちが不安定になるとからだの調子が悪くなる	対照群で当てはまらない傾向、臨床群で当てはまる傾向
p1	育児の相談をできる人がいる	対照群で当てはまる回答多い
p2	子どもと目が合うと嬉しい	全体で、当てはまるに寄るにしたがって人数増加の傾向
p3	痛がっている子どものからだをさすると、痛みがおさまるときがある	全体で、当てはまる傾向
p4	子どもが好きと思えない	全体で、当てはまらない傾向
p5	誰にも育児を手伝ってもらえない	全体で、当てはまらない傾向
p6	子どもの欠点が目につく	対照群で当てはまらない傾向、臨床群で当てはまる傾向
p7	子どもが期待通りいかなくて困る	全体で、偏らない傾向
p8	なぜか疲れやすい	全体で、当てはまる傾向
p9	育児に自信が持てない	対照群で当てはまらない傾向、臨床群で当てはまる傾向
p10	子どもに対してイライラする	対照群で当てはまらない傾向、臨床群で当てはまる傾向
p11	子どものいやな気持ちを取り除くことは母親の役目である	臨床群で当てはまらない回答が少ない
p12	子どもが何か悪いことをすると私のせいだと思ってしまう	対照群で当てはまらない回答多い
p13	子どもに関心を向けるようがない	全体で、当てはまらないが多い
p14	わが子がなぜ甘えてくるのかわからないときがある	全体で、当てはまらないが多い
p15	妊娠や出産のときにうれしくなかった	当てはまらないが多い
p16	砂遊びをさせることに抵抗がある	当てはまらないが多い
p17	オムツをかえるのはゆううつだった	当てはまらないが多い

ただし、対照群の規模や構成は不十分であるので、一般化は慎まなければならない。対照群との比較研究が当面の課題であるし、引き続き臨床事例データの集積を行い、今後はマニュアル化の方向で作業を進める事になるかと思われる。

#### 参考文献

- 川部哲也・長谷川智枝・西地まどか・平岡尚子・呉伽耶・堂野和人 (2013a)：発達障がいの特徴を捉える尺度項目作成の試み。大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要6, pp.21-31
- 川部哲也・長谷川智枝・橋本朋広・高橋幸治・川原稔久 (2013)：子育て質問票を用いた子育て支援の実践研究(1)―質問票の得点分布の特徴―。日本心理臨床学会第32回秋季大会ポスター発表
- 川原稔久・総田純次 (2013a)：「子育て質問票」研究の背景と全体像。大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要6, pp.5-7
- 川原稔久・総田純次 (2013b)：「子育て質問票」の実施法と今後の研究課題。大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要6, pp.39-41
- 橋本朋広・松本緑・後藤貴一・岩佐陽子 (2013)：家族機能および虐待リスクを捉える尺度項目作成の試み。大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要6, pp.33-37
- 総田純次・平岡尚子・西地まどか・作田大輔・澤樹亜美・後藤貴一・川原稔久 (2013)：子育て質問票を用いた子育て支援の実践研究(2)―臨床事例の質問票プロフィールの検討―。日本心理臨床学会第32回秋季大会ポスター発表
- 総田純次・平岡尚子・西地まどか・作田大輔・澤樹亜美・後藤貴一・川原稔久 (2014)：心理臨床センター臨床事例における子育て質問票プロフィールの研究。大阪府立大学大学院人間者科学研究科心理臨床センター紀要7, pp.29-36
- 高橋幸治・作田大輔・澤樹亜美・河邑淑子・石田暢子・中島歩 (2013)：親子の心とからだの関係を探る尺度項目作成の試み。大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要6, pp.9-19